

# 読売歌壇

## 小池 光選

障子紙新しくした元旦に部屋の空気が正座している

【評】部屋の空気が正座している、というところがあたらしい。障子紙をきれいに張り替えた正月の家。ぴんと張ったきよらかな空気が流れている。今年はいいことがありそう。正月を指折り数へし幼き日あのときめきを越ゆるものなし

伊勢原市 佐藤 治代  
【評】このものを想起すると、ほんとにお正月が待ち遠しかった。文字通りの指折り数えた。いまはお正月とて格別のことはない。なつかしきあの日々ときめきよ。

年金の振り込み通知ありがたし妻と茶を飲み和菓子をつまむ  
東京都 東 賢三郎

【評】ケーキでなく和菓子であるところに実感がこもる。いろいろ不満もあるが、年金はありがたい。妻と二人のつまみい暮らし。

五人めの曾孫誕生のよろこびをくだされ昭和十九年ゆく  
北本市 小林 栄子

屋上で練習をする生徒等の金管楽器冬日にキラリ  
さいたま市 大塚 数子

もしかしてどこかでお会いしたことがあるかと母はわれを指さす  
伊勢崎市 川野 忠夫

もらひたることも大きな干し柿を縁茶をいれてゆつくり食ひぬ  
仙台市 三角 清造

「モ「ちゃんへ」子犬の名を書きお年玉二千円送る娘の家に  
福山市 金尾 洵子

スッピン顔をさらしてねむりおり病室のベッドはわが城なれば  
藤沢市 赤松 光子

公園の落ち葉の向こう児童らが楽しそうだな雨が止んだね  
鳴門市 楠井 花乃

## 栗木 京子選

新年に親父の歌を書き写す一首一首と会話しながら

【評】父の日記や手帳などに短歌が記されていたのだろうか。新年に清書していると父の息づかいがよみがえる。「会話しながら」の感触は短歌だからこのように思われる。

三日日主婦がベッドで亀となるインフルエンザにいたたく休暇  
川崎市 大平真理子

【評】インフルエンザの流行が続いている。罹患した作者は大変だったが、それでも三日に思いがけない骨休めができた。家族で助け合う正月だったことが伝わる歌である。

手作りのバッグを見せるイベントの日となりて月一の通院  
新座市 睦月くらげ

【評】診察を待つ間、なごみの人たちに手作りバッグを披露する作者。通院の楽しみになっている。「イベント」に気合がこもる。

門松のひかる青竹そぎ口の鋭き楕円は宇宙の軌道  
横浜市 長倉メロン

「ここからの眺めいちはん」と母言ひし冬ネギ畑の夕景に佇つ  
町田市 根石 節子

医師歴も二十年とう教え子に初めて「先生」と付け賀状出す  
市川市 一之瀬 朗

音さへも凍てつく冬の森の道天より落つる白鳥の声  
新潟市 小幡 章

筑前煮のアクを捨てつつ吾の歌に足りないものは砂糖か塩か  
東京都 吉田 智子

似たような賀状じまいの挨拶の少しの違いにその人を知る  
所沢市 小室 佳久

「最後まで笑顔でした」に安堵する喪中ハガキの添え書き読みて  
四街道市 久賀田洋子

## 依 万智選

一枚のガラスが水を断ち切つて魚と人が出会ふ水族館

【評】水のなかの生き物と、空気の中かの生き物。本来、会うはずのない魚と人間。水族館を、大きな視点で捉えたところが新鮮だ。断ち切るという動詞に、水の重さがある。

一番と二番の歌詞をこちゃまに唄ったような子育ての日々  
燕市 田巻由美子

【評】あたふたして、だいたい合は合っているけれど、どこかつじつま合わせ。そんな子育ての日々を捉えた比喩が楽しい。とにかく、それでも唄ったことが尊いのだ。

このころは自分の年より子の年で時の流れの速さを感じる  
東京都 野上 卓

【評】シンプルにして、実感のこもった一首。大きなできごと、だんだん子どもの年で覚えるようになる。

あなたへと書いた手紙の友情と呼ぶには少し深い筆圧  
福岡市 栂島 由佳

凸と凹だけれど長く向き合えばファスナーみたいに噛み合っていく  
越谷市 あきやま

コッパン並べた様な今朝の雲世は平穩に過ぎてゆくべし  
大阪市 黒田 道子

この部屋に命はひとつしかない気が付いて窓を全開にする  
横浜市 紺屋 小町

おやすみ で通話が終わる水際で夜になるのはいつもきみから  
八王子市 吉村のぞみ

轟音を立て通り過ぐ「はやぶさ」がタイムスリップしたそうな夜  
仙台市 小野寺寿子

しゃべる人あなければ口のチョコレートゆつくり溶かす言葉のやうに  
青梅市 諸井 末男

## 黒瀬 珂瀾選

珈琲の豆を焙煎するきみの慈愛ごと飲む時間をかけて

【評】タイプ・コスパと連呼される現代こそ、ゆとりを大切にしたい。丁寧に豆を煎る豊かな時間そのものが「きみの慈愛」なのです。十年後なくなる仕事と言われおり上等だ十年働こう

大和郡山市 大津 穂波

【評】AIや技術が人にとって代わるという時代です。でも私は、目の前の仕事にしっかりと取り組む。そこに、われらは人間であるという誇りがあるのでしょうか。

貧しきを豊かにせむと父植多し杉に買値のつかぬが哀し  
群馬県 真庭 義夫

【評】「買値のつかぬ杉」の悲しさを長らく詠み続ける作者。かつての父の想いが、現代には通じない。国内林業を軽視したままで良いのか、という問いがこの歌にはあります。

晩秋の干し大根はじつくりと光や風の味もまといぬ  
角田市 豊岡 浩一

雪吊や庭師の技に守られて兼六園は春を待つかな  
茨城県 片岡 忠彦

銃声の餌となりぬ枯野径に射止めたる猪引き出す猟師  
和歌山市 針谷 国光

菩提寺の植の植え替え無事に終えひとりのための雑煮をつくる  
東大阪市 池田 敏子

子を二人育てあげしをよしとして今それなりの年金を食む  
長野市 本間 浩子

出勤中に必死に呼ばふ人見しを忘れしと能登の救助隊員  
小野市 大野多恵子

煩惱のままに生き抜き病室に除夜の鐘聞く傷口うずく  
大阪市 鍵田 剛

次回は11日(火)掲載予定  
◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。  
◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。〒103・8601、にほんぼし蔵前郵便局留、読売歌壇、〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから 右の影絵はまめまき